

## 実践事例 2

# 「わたしたちの体育」を活用した実践例 みんなが楽しい体育を目指して

～走・跳の運動（高跳び）4年生の実践を通して～

境港市立外江小学校 渡瀬 慎太郎

### 1 主題設定の理由

全ての児童が我を忘れて活動に没頭するような姿がみられるように運動の特性に触れさせることや、技ができるようになったり自己の目標が達成したりする満足感、友達に認められる安心感などを感じさせることが楽しさにつながると考えて本実践に取り組んだ。このような楽しさに触れる学習が、境港市で取り組んでいる「できる・分かった・もっとやってみたい」と感じる体育学習にもつながると考えている。

### 2 指導の工夫

- (1) コツの共有化 単元前半に児童の発言や活動の中から技能のコツをまとめ、「見える化」することで相互評価しやすくなった。また、コツを3～4つに絞ることでより明確化し、見合い・教え合いが活発になった。
- (2) 宣言跳び ペアの児童に自分がどんなこと（コツ）に気を付けて跳ぶのかを宣言してから跳ぶことで、自らの課題をより意識して跳ぶことができた。また、ペアの児童も見る視点が明確なため評価しやすくなった。
- (3) ポイントゲーム 4分間で一人3回跳ぶことができる。新記録が出れば3点、タイ記録は2点、自己記録より低い高さを跳べば1点。どの高さでも失敗すれば0点。3回の合計点で競う。高さを競うのではなく、自己記録への挑戦でポイントがたまるので、有利不利がなく、個人戦では誰にでも優勝のチャンスがあることで、すべての児童が意欲的に取り組んでいた。チーム戦では、チームの勝利のために互いに応援し合い、跳べた時にはチームの友達がみんな喜んでくれることへの満足感や役立ち感を感じることができた。3点、2点、1点と合計しやすい得点も時間短縮になり、運動時間確保につながった。
- (4) 情意変容の見取り 楽しかったかどうかとその理由を毎時間把握し、次時の指導に生かすようにした。跳場の数を増やしたり、練習方法を改善したり、友達のアドバイスから跳べるようになった喜びを紹介したりできた。

### 3 場づくりの工夫

高跳びの学習で高さを変える作業は、一人一人の課題に応じた手立てとして重要ではあるが、これには多くの時間がかかることが多い。本実践では、60cm～100cmを10cmずつの5跳場にし、宣言跳びもポイントゲームも高さを変えずに、児童の方が場所を変えて跳ぶことで時間短縮を図った。高さを変える手間がないため待ち時間も少なく、自己記録更新に向けて没頭できた。

### 4 『わたしたちの体育』の活用

児童の発言から動きのコツにつなげる場合や動きをイメージさせるのに、わたしたちの体育との合致で信頼性が増したり、動きのイメージがふくらんだり大変役立った。

### 5 成果と課題

- ・高さに挑戦することに没頭できる時間を確保し、その中で技能の向上が必然的に図られるような取り組みを目指したことで、高跳びの楽しさを体感できた児童が多かった。
- ・動きのコツを明確化して相互評価しやすしたり、チーム戦のゲーム形式を取り入れたりしたことで、教え合いが活発になり、協同する楽しさを感じることができた。
- ・助走について、高学年での「リズムカルな助走」につながるような系統的な指導については今後の課題である。